

国際政治(6単位) 総合社会科学科

(国際関係論特殊研究Ⅲ(4単位) 国際社会科学専攻)

2004年度冬学期

担当: 山影進

講義: 火曜2限、金曜2限(1221)

1. 趣旨

この授業は、国際関係の特に政治的側面を理解することを目的として、いわゆる国際政治学の基本(基礎概念とその簡単な操作)を集中的に学んでもらうものである。現実の国際政治を解説・論評することを趣旨とする授業ではないが、履修することにより、現実の国際政治に対する履修者の見方が豊かになることを目指している。

また、この授業は国際関係論分科の内定生にとっては分科課程における必修科目の「三本柱」(国際政治、国際法、国際経済)の一つであり、かつ最初のものであるから、学際的な国際関係論の専門課程への入門としても位置付けられている。

前期課程の国際関係論を履修していることは前提にしていない。ただ、世界史(特に近現代)に関する常識的な知識があることが望ましい。これと関連して、国際関係史の履修も勧める。なお、この授業の内容は、山影担当の前期課程の国際関係論の内容と一部重複している。

今年度は、2部構成にしてみた。前半は「国際社会の成り立ち」として、私たちが前提としている今日の国際社会がなぜ、そしてどのような経緯で、このようなものになったのかを理解してもらう。ここでは、国際政治学の研究対象である主権国家システムを所与として受け入れるのではなく、それ自体の動態を捉えることを目指す。後半は「国際政治の分析」として、主体間相互作用の標準的分析の解説から始め、やや複雑な分析を簡単に紹介する。ここでは、パワーを分析概念の基礎とするのではなく、コミュニケーション、コントロール、アイデンティティという相互関係の3基本概念から国際政治のあり方を組み立てることを試みる。「試み」である以上、失敗するかも知れない。最後に、国際政治学そのものを分析対象にしてみたい。

2. 授業の進め方と評価の方法

他の二つの必修科目と同じように、インテンシブな基礎的授業である。授業は週2回の講義と週1回の演習とで進めていく。したがって、週3回(火曜2限、金2、3限)の全てに登録しておくこと。まとめて6単位が与えられる(大学院生の履修に関しては例外措置がある 後述)。

講義・演習で毎回何をテーマとして取り上げるかは、別途の計画表のとおりである。ただし、授業の進捗状況などを考慮して変更することがある。

週2回の講義が何よりも基本である。参加者は、毎回指定された必読文献を事前に読んで講義に出

席すること。参考文献も指定するので、予習ないし復習を兼ねて、目を通すことが期待されている。講義の必読・参考文献は、日本語文献に限定して、負担過剰にならないように配慮したので、必ず、読む習慣を付けること。なお必読文献は、講義の前提（基礎）になるもの、または講義を補完するものであり、講義の中で解説する文献ではない。

演習は、講義を補完することを目的として、講義で取り上げたテーマに関連して研究者が現在共有している問題意識について指定文献を材料にして、議論を行う。大学院博士課程の助手と院生 TA の指導のもとに小人数のクラスに分かれて行う。演習のやり方は各クラスのリーダーに任されているが、指定文献は全員が事前に必ず読んでおくこと。報告者は、必ずレジュメを用意してクラスのメンバーに配布すること。英語文献（学術用語、論法）に慣れることと、報告・討論のやり方に慣れることも重要である。

成績は、(1) 学期途中で提出する小レポート（2 回、各回日本語 4 千字枚程度）、(2) 期末の筆記試験、(3) 講義への出席度、(4) 演習への参加度（出席回数、文献の理解度、報告・発言の熱心さ）などを総合的に判断して評価する。（大学院生に関しては、大学院科目に履修登録すれば、演習に参加することなしに、週 2 回の講義出席と 2 回のレポートおよび期末試験の評価により 4 単位を与えるという特例がある。もちろん、学部科目として履修登録して、演習にも参加して 6 単位を取得することも可能である。）

3. その他

参考文献などのリザーブ・システム

講義の必読文献・参考文献は、2号館5階の社会科学図書室にリザーブ(禁帯出・別置)してある。予習・復習に活用すること。演習の指定文献のうち、原則としてマスター・コピーを用意するので、各自コピーすること。

参考文献ガイド

(1) 準教科書(講義の中で、必読文献・参考文献として頻繁に指定されるもの)

山本吉宣(編)『国際政治の理論』(『講座 国際政治 1』)東京大学出版会、1989 年。

山本吉宣『国際的相互依存』東京大学出版会、1989 年。

田中明彦『世界システム』東京大学出版会、1989 年。

山影進『対立と共存の国際理論』東京大学出版、1994 年。

ヘドリー・ブル『国際社会論』岩波書店、2000 年。(原著は 1977 年刊)

小和田恆・山影進『国際関係論』放送大学教育振興会、2002 年。

(2) 参考書(寸評付き)

衛藤瀋吉他『国際関係論』(第2版)東京大学出版会、1989年。
駒場 Jr 教科書。入門書のくせに難解との悪評だが、理論的に高度なだけ。良書。初版でも可。
有賀他(編)『講座 国際政治』(全5巻)東京大学出版会、1989年。
二〇年前の学界の水準。新企画が新編集陣で進行中(で近刊のはず)。
白鳥令(編)『政策決定の理論』東海大学出版会、1990年。
対外政策決定ではないが、目配り良い。なお、有名なアリソン『決定の本質』は訳書(原著初版)ではなく、必ず、原著第二版を読んでね。
岡部達味『国際政治の分析枠組み』東京大学出版会、1992年。
学学(論論)を批判し、実証分析対象を持たない国際政治学はあり得ないと喝破する研究者による理論書。
川田侃『国際学 国際関係研究』東京書籍、1996年。(『国際関係概論』東京大学出版会、1958年が元版)
パイオニアによる挑戦。駒場発の国際関係論で長年にわたり学界に影響。駒場がなぜ学際的教育を強調してきたのか良く分かる。当時のアメリカの国際政治学が良質だったことも良く分かる。
E. H.カー『危機の二十年』岩波書店(文庫)、1996年。
国際関係論の独立宣言。本当は原著第二版(訳書の底本)を読んでもらいたい。川田といいカーといい、パイオニアの作品には全てがある。
G. A. クレイグ・A. L. ジョージ『軍事力と現代外交』有斐閣、1997年(原著は1995年)。
パワー・ポリティックスの国際体系史(第1部)と外交論(第2部)。歴史から学ぶ姿勢は正しい。
鈴木基史『国際関係』(社会科学の理論とモデル2)東京大学出版会、2000年。
Realist であれ Liberal であれ所詮 Rationalist。つまりゲーム論。経済学を少し勉強してから。
進藤榮一『現代国際関係学』有斐閣、2001年。
学の総合と関与を目指す。立場は異なるが、本講義と狙いは似ている。目次が壮観。
渡邊昭夫・土山實男(編)『グローバル・ガヴァナンス』東京大学出版会、2001年。
書名のとおり論文集。
岩田・小寺・山影・山本(編)『国際関係研究入門』(増補版)東京大学出版会、2003年。(特に、第2章「国際政治論」(山本吉宣))
駒場 Gr 副読本。研究への誘いが目的だが、実はプロの「ネタ本」化。初学者には分野別の単なる専門書紹介にしか見えない。序章は Jr でも Sr でも使える(はず—自画自賛)。
日本国際政治学会(編)『国際政治』124(国際政治理論の再構築)有斐閣、2000年。
日本国際政治学会(編)『国際政治』132(国際関係の制度化)有斐閣、2003年。
『思想』2003年1月号(No. 945)(特集—帝国・戦争・平和)
上の3冊は、本講義が易しすぎる人向け。退屈するより上を目指そう。それ以外の人でも、目次に目を通して興味が湧いた論文があったら是非一読を。

(3) 英文による「教科書」として使用可能な書籍

(2003年山本吉宣先生推奨、山影の寸評付き)

Karl W. Deutsch, *The Analysis of International Relations*, 3rd ed., Englewood Cliffs, N.J.: Prentice Hall,

1988.

名著。米国ではもはや使われていないが(著者が死ぬと一般的)、やはり名著。他の教科書と比べると(視野狭窄になったプロ以外には)すぐ判る。

John Baylis and Steve Smith, eds., *The Globalization of World Politics: an Introduction to International Relations*, 2nd ed., Oxford: Oxford University Press, 2001.

バランスの良い網羅的教科書。英国の研究者が執筆陣だが、英国学派のにおいはしない。

David Held, Anthony McGrew, David Goldblatt and Jonathan Perraton, *Global Transformations: Politics, Economics and Culture*, 2nd ed., Cambridge: Polity Press, 2002.

これも英国生まれ。学際的にグローバル化の影響を概観。訳書があるが、無視。

Bruce Bueno de Mesquita, *Principles of International Politics: People's Power, Preferences, and Perceptions*, Washington, D.C.: CQ Press, 2000.

米国経済学入門教科書の国際政治学版いよいよ登場。

Charles W. Kegley, and Eugene R. Wittkopf, *World Politics: Trend and Transformation*, 8th ed., Boston: Bedford/St. Martin's, 2001.

分析的というより概説中心の国際政治入門書。類書も多い。

(翻訳も利用可能なもの)

Hans J. Morgenthau, *Politics among Nations*, 5th ed., New York: Knopf, 1973(モーゲンソー『国際政治』福村出版, 1986年)。

先入観(古い、固い、厚い)を排除して挑戦しよう。良質のリアリストに出会うはず。

Hedley Bull, *The Anarchical Society*, London: Macmillan, 1977(ブル『国際社会論』岩波書店、2000年)。

英国学派による国際秩序論。訳書を準教科書に指定。良書の良訳。

(4) 辞典類

国際法学会(編)『国際関係法辞典』三省堂、1995年。(改訂版、近刊の予定)。

猪口・大沢・岡沢・山本・リード(編)『政治学辞典』弘文堂、2000年。

川田侃・大島英樹(編)『国際政治経済辞典』(改訂版)東京書籍、2003年。

田中・中西(編)『新・国際政治経済の基礎知識』有斐閣、2004年。

(5) 研究ガイド・文献ガイド

Peter J. Katzenstein, Robert O. Keohane, and Stephen D. Krasner, eds., *Exploration and Contestation in the Study of World Politics*, Cambridge, Mass.: MIT Press, 1999.

Walter Carlsnaes, Thomas Risse and Beth A. Simmons, eds., *Handbook of International Relations*, London: Sage, 2002.

岩田・小寺・山影・山本(編)『国際関係研究入門』(増補版)東京大学出版会、2003年。

(6) 国際政治の理解を深めるための歴史参考図書

岡義武『国際政治史』岩波書店(全書)、1955年。(絶版、岡義武著作集第7巻に再録)
 宮崎市定『アジア史概説』中央公論社(文庫)、1987年。
 加藤祐三・川北稔『アジアと欧米世界』(世界の歴史25)中央公論社、1998年。
 石井修『国際政治史としての二〇世紀』有信堂、2000年。
 衛藤藩吉『近代東アジア国際関係史』東京大学出版会、2004年。

以下「山川世界史リブレット」シリーズより

青木康征『海の道と東西の出会い』(世界史リブレット25)山川出版社、1998年。
 小泉徹『宗教改革とその時代』(世界史リブレット27)山川出版社、1996年。
 高澤紀恵『主権国家体制の成立』(世界史リブレット29)山川出版社、1997年。
 谷川稔『国民国家とナショナリズム』(世界史リブレット35)山川出版社、1999年。
 木谷勤『帝国主義と世界の一体化』(世界史リブレット40)山川出版社、1997年。
 茂木敏夫『変容する近代東アジアの国際秩序』(世界史リブレット41)山川出版社、1997年。
 古田元夫『アジアのナショナリズム』(世界史リブレット42)山川出版社、1996年。
 木畑洋一『国際体制の展開』(世界史リブレット54)山川出版社、1997年。
 石見徹『国際経済体制の再建から多極化へ』(世界史リブレット55)山川出版社、1996年。
 室井義雄『南北・南南問題』(第2版)(世界史リブレット56)山川出版社、2003年。

計画表(月/日、〔講義、演習〕、テーマ、〔必一必読文献、参一参考文献〕)				
月	日	講義	演習	テーマ / 文献
10	5	1		イントロダクション
				第1部 国際社会の成り立ち
				――主権国家システムの生成と変容を中心に――
	8	2		地球社会の中の国際関係
				必一ブル『国際社会論』第2章
	8		1	
	12	3		モデルとしての国際システム類型
				必一田中『世界システム』第1章、2章

	15	休講		-----
	15		2	何を問題にするのか？ (課題文献は別添)
	19	4		主権国家システムの生成 必ー山本編『国際政治の理論』第1章(斉藤) 参ー山川世界史リブレット27, 29
	22	5		主権国家システムの構造 必ーブル『国際社会論』第7, 8章 参ー山影『対立と共存の国際理論』第1部序, 第1章 参ークレイグ・ジョージ『軍事力と現代外交』第3章
	22		3	国家主権とはどのような概念か？ (課題文献は別添)
	26	6		近代国際システムの拡大 必ー田中『世界システム』第8章 参ー加藤・川北『アジアと欧米世界』 参ー山川世界史リブレット25, 40
	29	7		近代国際システムの構造 必ー山本編『国際政治の理論』第2章(浜下) 参ー衛藤『近代東アジア国際関係史』第2章 参ー山川世界史リブレット41
	29		4	文明とは何なのか？ (課題文献は別添)
11	2	8		国民国家の登場と国際関係の変容 必ー小和田・山影『国際関係論』第2章 参ー山川世界史リブレット35
	5	9		ナショナリズムの多面性 必ーゲルナー『民族とナショナリズム』岩波書店、2000年、第4, 5, 7章

			参ーコバン『民族自決と民族国家』早稲田大学出版部、1976年、第2部
			参ー浅羽通明『ナショナリズム』筑摩書房(ちくま新書)、2004年
5		5	我々という主体は誰なのか？ (課題文献は別添)
9	10		制度化(1)戦争の違法化と集団安全保障 必ー小和田・山影『国際関係論』第6章 参ークレイグ・ジョージ『軍事力と現代外交』第8,9章 参ー山川世界史リブレット54
12	11		制度化(2)交流・通商・経済の管理 必ー小和田・山影『国際関係論』第7章 必ー山本編『国際政治の理論』第7章(山影) 参ー山影『対立と共存の国際理論』第2部序,第1章 参ー山川世界史リブレット55
12		6	国際政治に規範はどれほど重要なのか？ (課題文献は別添)
16	12		変質(1)非植民地化と開発問題・民族問題 必ー小和田・山影『国際関係論』第8,9章 参ー人間の安全保障委員会『安全保障の今日的課題』朝日新聞社、2003年。 参ー山川世界史リブレット56
19	13		変質(2)主権国家システムの相対化 必ー小和田・山影『国際関係論』第5,10章 参ーブル『国際社会論』第11,12章 参ー田中『新しい中世』日本経済新聞社(文庫)2003年、第7,8章
19		7	新しいシステムはどのようなものになるのか？ (課題文献は別添)
23	yasumi		-----

				第2部 国際政治の分析道具
				――コミュニケーション・コントロール・アイデンティティ――
	26	14		国益と国力
				必―田中『世界システム』第3,4章
				必―小和田・山影『国際関係論』第3章
				参―船橋洋一『通貨烈々』朝日新聞社、1988年。
				参―野口均『日米通貨交渉 2000 日』日本経済新聞社、1995年。
	26		8	国家は「アクター」なのか？ (課題文献は別添)
	30	15		状況と合理的国益追求
				必―白鳥(編)『政策決定の理論』第8章(山影)
				参―白鳥(編)『政策決定の理論』第2章(山本)
12	3	16		外交ゲームの基礎
				必―山影『対立と共存の国際理論』第1部第2章前半
				参―ディキシット・ネイルパフ『戦略的思考とは何か』TBSブリタニカ、1991年
	3		9	対外政策は合理的に決定され得るか？ (課題文献は別添)
	7	17		協力ゲームとしての外交交渉
				必―山影『対立と共存の国際理論』第1部第2章後半
				参―山本編『国際政治の理論』第11章(山本)
	10	18		2層ゲーム(国際国内連動ゲーム)の基礎
				必―山本『国際的相互依存』第3章
				参―山影『対立と共存の国際理論』第2部第2章
	10		10	外交はどのように内政の延長なのか？ (課題文献は別添)
	14	19		外交の失敗

			必一クレイグ・ジョージ『軍事力と現代外交』第15, 16章
			参一薬師寺克行『外務省』岩波書店(新書)、2003年
	17	20	非公式帝国・覇権・レジーム
			必一山本『国際的相互依存』第4, 5章
			参一田中『新しい中世』第3, 4章
	17	11	アメリカをどう見るか？ (課題文献は別添)
	21	21	平和をもたらす制度の構想
			必一山影『対立と共存の国際理論』第1部第3章
			参一カント「永遠平和のために」各版
	24	22	文化・共同体・政治化
			必一山影『対立と共存の国際理論』第3部序, 第1章
			参一ロバートソン『グローバリゼーション』東京大学出版会、1997年、第1, 2, 6章
			参一新保満『人種的差別と偏見』岩波書店(新書)1972年。(絶版?)
	24	12	憎しみ合いの悪循環からいかに脱出するか？ (課題文献は別添)
1	11	(getu)	-----
	14	23	自己変革と自己組織化
			必一山影『対立と共存の国際理論』第3部第2章
			参一山影・服部(編)『コンピュータのなかの人工社会』共立、2002年、第4部
			参一山本和也博士論文(「ネーションの複雑性」)序章、第3章
	14	13	対立の分析か共存の追求か？ (課題文献は別添)
	18	24	学学(論論)または世界観と認識方法
			必一山本編『国際政治の理論』第5章(猪口)
			必一山本『国際的相互依存』第1章

				参ーブル『国際社会論』第4章
				参ー山本吉宣「20世紀の国際政治学ーアメリカ」『社会科学紀要』2000, 2001年
	21	25		総括
				必ー山影『対立と共存の国際理論』序章, 終章
	21		yasumi	
	25	26		予備日
2	?			期末試験

国際政治2004ゼミ 指定文献リスト

10 / 8 説明、班分け

10 / 15 何を問題にするのか？

Karl W. Deutsch, *The Analysis of International Relations*, 3rd edition, Prentice Hall, 3rd edition, 1988. Preface(前半), Introduction, Chap.1.

(国際政治が扱う諸問題の広がりや深みをまず知ってもらいたい)

10 / 22 国家主権とはどのような概念か？

Daniel Philpott, *Revolutions in Sovereignty: How Ideas Shaped Modern International Relations*, Princeton University Press, 2001. Chap. 2.

(この基本中の基本概念をめぐって大論争が展開中。概念の中身の変化に注目しよう)

10 / 29 文明とは何なのか？

Edward Keene, *Beyond the Anarchical Society: Grotius, Colonialism and Order in World Politics*, Cambridge University Press, 2002. Chaps. 4(後半 p. 109-), 5(前半 -p.135).

(ハンティントンの議論は浅い。西欧中心史観の根の深さを反省する人も欧米にいるのだ)

11 / 5 我々とは誰なのか？

Karl W. Deutsch, *Nationalism and Social Communication: An Inquiry into the Foundations of Nationality*, MIT Press, 2nd edition, 1966. Chap. 4.

(初版は半世紀前だが、まだ旧くならない。今日の議論が陳腐に見える「新しさ」を味わおう)

11 / 12 国際政治に規範は重要か？

Robert H. Jackson, *The Political Theory of International Society*, and
Jean Bethke Elstain, *International Politics and Political Theory*,
in Ken Booth and Steve Smith, eds., *International Relations Theory Today*, Polity Press, 1995.

(規範重要説を学ぼう。当たり前？ それなら大変結構。もっと難しい議論がいくらでもある)

11 / 19 新しいシステムはどうなるか？

Andrew Linklater, *The Transformation of Political Community*, Polity Press, 1998. Chap.1.

(国民国家の時代の次には何が来るのだろうか。「社会的動物」に戻って考えよう)

11 / 26 国家はどのようなアクターか？ (文献差し替えの可能性あり)

Martha Finnemore, *National Interests in International Society*, Cornell University Press, 1996.
Chap. 1.

(「国益はパワーではない」論に触れよう。学説批判の議論では登場する用語や概念がやや難解。)

12 / 3 対外政策はどのように決まるのか？

Graham Allison and Philip Zelikow, *Essence of Decision: Explaining the Cuban Missile Crisis*,
Second Edition, Longman, 1999. Chaps. 3, 5.

(古典化。残念ながら輸入モノ。「現実」とは何かを考えながら「モデル」を学ぼう)

12 / 10 内政と外交とはどのように絡み合っているのか？

Robert Putnam, *Diplomacy and Domestic Politics*, and

(何かもう1章、TAと相談して選ぶこと)

in Evans, Jackson and Putnam eds., *Double-Edged Diplomacy: International Bargaining and
Domestic Politics*, University of California Press, 1993.

(国内政治と国際政治との連関はいろいろ議論されてきた。今日の多くの実証研究の雛形)

12 / 17 アメリカをどう見るか？

S. ホフマン『国境を越える義務』(三省堂、1985年)対 J. ナイ『不滅の大国アメリカ』で(読売新聞社、1990年)で討論

(アメリカ帝国論が姦しい。落ち着いて考えてみよう。精読ではなくざっくりと理解して)

12 / 24 憎しみ合いを止めるにはどうすればよいのか？

David A. Lake and Donald Rothchild, eds., *The International Spread of Ethnic Conflict: Fear,
Diffusion, and Escalation*, Princeton University Press, 1998. Chap. 9.

(何かもう1章、TAと相談して選ぶこと)

(原因論(Chap. 1)も重要だが、どうしたら犠牲者を減らすことができるだろう)

1 / 1 4 対立の分析か共存の追求か？

E. H. カー 『危機の二十年』第一部(第一章、第二章)

川田侃 『国際関係研究』第1章

(何のために国際関係論を学ぼうとしているの?)